

—日本画を超えた日本画— 塩原友子の挑戦

日本画とはそもそも洋画に対する概念であったが、第二次世界大戦後、明治以降の日本画のあり方を見直し、根本的な変革を求めようとする機運がおこり、1960年代に入ると当時の社会状況とも結びつき、日本画における自由な表現を試みる動きはさらに活発になる。塩原友子が1964年から参加した「日本画研究会」には、当時、異端児とされた中村正義、片岡球子、三上誠、横山操ら多くの日本画家の他に、洋画家や建築家、音楽家などがオブザーバーとして参加していた。こうした日本画の変革をめざす方向性には、洋画にならって日本画の様式的な近代化を求めるものと、西洋化とは異なる日本独自の質を探りながらより根本的な変革を求めるものに分かれたが、塩原が求めたのは後者であった。

この研究会の活動の発展として美術評論家針生一郎も参画し、1966年から3回にわたり日本画廊で開催されたのが「これが日本画だ！」展である。出品作には日本画の概念を突き破ろうとする実験的な作品が多く、中村正義は蛍光塗料を用いて舞妓の姿を無造作にデフォルメし、記号に近づけようと試み、片岡球子は富士山をモザイクのように分解し、力強く奔放に再構成した。塩原の出品作《イワンの肖像》(1966年)は、赤く彩色した画面に紙片を貼り付け、その上に色を塗り、あるいは削ることで色を出していく独特のコラージュの手法により、墨の黒、和紙の白、赤の彩

色というシンプルな色彩でありながら、重厚さと深みを湛えている。この展覧会では、まだ画壇での知名度のない作家たちの方がより思い切った実験を試みており、当時、まだ若手であった塩原の作品はひとときわ尖鋭さを放っていた。塩原を含め日本画の改革に挑んだ作家たちの活動は、後に「戦後日本画変革の戦士たち」(1987年、渋谷西武)、「日本画の抽象」(1994年、O美術館)などで検証されている。

塩原の自由で革新的な精神は、郷里の前橋に戻った後に結成した「前橋日本画創作会」(後の燦々会)での指導においても発揮された。コラージュの技法や曼荼羅の幾何学的な再構成などを試みながら、故郷の風景や日常に在る農作物や花などのモチーフを重ね合わせるなど、常に独自の視点による新たな挑戦によって日本画の枠組みを超えながら、塩原は常に「日本画とは何か」を問い続けた。



《イワンの肖像》1966年
群馬県立近代美術館蔵